あおぎりの花
ともに学び　ともに生きる　心美しき子ども
第７号（全国学調報告号）
令和６年１０月１１日
山梨大学教育学部附属小学校
https://www.agr.yamanashi.ac.jp/
文責：国語科・算数科研究部・６学年・中込

令和６年度　全国学力・学習状況調査における本校の状況

令和６年４月１８日に全国学力・学習状況調査が国において実施されました。本校では６年生 102 名がこの調査に参加しました。この調査の目的は、大きく二つあります。一つは、児童が自分自身の学力と学習状況について振り返り、今後の学力向上に意欲をもって取り組めるように意識を高めることです。もう一つは、指導者である教師が、本校における児童の学力や学習状況を把握し、各教科における指導のあり方について検証を行い、今後の学習指導を向上させていくことです。この全国学力・学習状況調査は、①教科に関する内容（国語・算数）、②生活習慣や学習環境などに関する質問紙調査から構成されています。①の教科に関する調査（国語・算数）は、「身につけておかなければのちの学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能　等」「知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力　等」を一体的に問うこととしています。次に、本校における状況についてお知らせします。

１　本校の状況

本校の結果は、国語・算数の両教科おいて全国の平均を大きく上回っています。また、両教科共通して「知識・技能」の観点において優れた結果となっていました。

国語では、「書くこと」と「読むこと」の領域が特に正答率が高くなっています。中でも、目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる課題は、全国平均に比べ非常に高い正答率となっていました。

算数では、無回答率が低いことが特長としてあげられます。また、「数と計算」の領域において全国平均と比べ高い正答率となっていました。特に、問題場面の数量関係を捉え式に表す課題は、全国平均に比べ非常に高い正答率となっていました。

今回の結果より、基礎基本の定着が確実に図られていることや課題解決に向け、知識等を活用し取り組む力が高いことが明らかになりました。子供たちが意欲をもち、粘り強く課題に取り組む姿を大切にしながら指導してきたこともこのような結果の一因と推測されます。

平均正答率（%）	国語	算数
全国	６７．８	６３．６
山梨県	６８	６２

２ 教科に関する内容より

(1)国語科

①主な成果と課題

まず、成果としては、今回問われた全ての出題に対して、高い正答率であったことが挙げられます。これは学習指導要領で示されている「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力が高い水準で身に付いていることを表しています。「知識及び技能」については、「読書の意義」について捉える問題で、全国平均を 14%近く上回っています。「思考力、判断力、表現力等」においては、「目的に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりすること」「目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」ことといった「書くこと」の資質・能力を問われた問題で、非常に高い正答率や全国平均を大きく上回る正答率となりました。昨年度改善傾向にあった無解答率は、低い水準を示していますが、設問によっては高いものがありました。

次に、課題としては、調査結果から、全国平均を上回る正答率を示しながらも、「話すこと・聞くこと」の領域における「表現・共有」の資質・能力に改善の余地があることが分かりました。具体的には、「資料などを活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫する」ことについて意識的に指導を行い、改善を図っていく必要があります。

②指導の改善点

今年度の調査から明らかになった本校の課題に対しては、その課題に応じた授業を行うことで改善を図っていく必要があります。具体的には、「資料などを活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫する」といった「話すこと・聞くこと」の「表現・共有」の資質・能力の育成に焦点を当てた授業の実践です。この「表現・共有」の資質・能力については、相手や目的を意識する中で、聞き手の興味関心に応じた資料の準備や反応に合わせた話し方の検討などの学習活動を通して、資料などを活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することの意義や必要性を実感できるように指導することがねらいとなっています。一度、設定した相手や目的を変更することで、相手によって必要な資料や伝わりやすい言葉の違いなどについて考えることもできます。その際、できる限り子ども達の実態に合わせて相手を設定したり変更したりする必要があります。

これらの資質・能力については、「話すこと・聞くこと」に限らず、「書くこと」や「読むこと」といった国語科内の他の学習においても育成を目指すことができます。さらに、必要な資料や表現の工夫点などについて、他教科等と関連して指導するなど、国語科の学習を土台としながら他教科等でも育成を図ることも考えられます。

(2)算数

①主な成果と課題

すべての領域において高い正答率であり、全国平均を上回っていました。特に「数と計算」領域において全国平均よりも高い正答率を示しています。問題別にみると「３５０×２＝７００であることを基に、３５０×１６の積の求め方と答えを書く」問題において、記述式の問題にもかかわらず全国平均よりも約 15%以上高い正答率となっていました。

観点別では、すべての観点において高い正答率であり、選択式と短答式、記述式ともに高い正答率を示しています。また、無回答率も極めて少なくなっていました。

一方で、唯一課題点を挙げるとするならば、「図形」の領域です。全国平均よりも約９％上回っていますが、本校正答率は約 60％と全領域の中で低くなっています。さらに、問題別にみると「直径２２ｃｍのボールがぴったり入る箱の体積を求める式を書く」問題において、無回答率が約 9.8％と高くなっていました。

②指導の改善点

今回の調査では、全ての領域において高い正答率が見られました。基礎的・基本的な知識・技能が身に付いており、それを活用する項目においても高い正答率が見られました。また、記述式の問題において無回答率が低かったことから、子供自らが問い、友だちと学び合おうとする姿が高い正答率に結び付いたと考えられます。

一方で、課題点として挙げた「図形」の領域については、図形の学習の際、図形を構成する要素などに着目して必要な情報を選び出したり、面積の求め方について筋道を立てて説明したりする活動や、図形同士の関係を捉えたりする活動を充実していくことが重要になります。そのために、例えば、観察や構成などの活動を通して、円と球を関連付けながら図形の性質や図形の計量について考察できるようにすることが大切であると考えます。また、図形を構成する要素やそれらの位置関係を基に、図形の構成の仕方について考察できるようにすることも大切になります。

問題解決にあたって、具体物や図、数直線などを用いて考察する活動の充実や、式と具体的な場面を関連付ける場を設定することで、継続的に数学的に考える力を伸ばしていきたいと考えます。さらに、日々の授業が算数場面だけに留まらず、日常生活にも活用できるよう、日常の生活場面に即して判断したり活用したりする活動を設定していきたいと考えています。

3 質問紙調査より

(1)質問紙調査の主な特徴

質問紙調査は、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面に関する質問に、児童自らが回答する調査です。子どもたちの更なる成長につなげるという観点で、附属小学校の質問紙調査の結果を分析しました。本校の教育目標と照らし合わせ、大切にしたいと考える項目を抜粋し、以下に示します。詳しくは国立教育政策研究所ＨＰにも「令和６年度全国学力・学習状況調査報告書【質問紙調査】」として掲載されていますのでご覧ください。

①基本的生活習慣等　…　「元気な子」

「朝食を毎日食べていますか。」「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。」という質問に対して、「している」「どちらかといえば、している」と回答している児童の割合がいずれも全国平均を上回っており、特に朝食については９７％と高水準です。基本的な生活習慣の定着は豊かな学びの基礎となる重要な要素であると考えます。学校と家庭との連携・協力を今後とも図っていきたいと思います。

②自己有用感等　…　「思いやる子」

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」「人が困っているときは、進んで助けていますか」とい

う質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答している児童がいずれも９割以上となっており、自己から他者への思いやりの心が育っていることが読み取れます。

③学習意欲、方法、習慣等　…　「考える子」

「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」という質問に対して、「よくしている」「ときどきしている」と回答している児童の割合や、平日、休日ともに「学校の授業時間以外に勉強する時間」や「新聞を読む頻度」について全国平均を上回っていました。また、ICT 機器の活用による有用性について問う質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答している児童の割合も、全国平均を上回っているものが多かったです。ICT を活用することにより自らの学びにつなげたり、深めたりしていることが読み取れます。

(2)質問紙調査からの改善点

確かな学習・生活習慣に支えられた高い学力・学習状況にあり、よく学び、よく考え努力することができる児童が多いからこそ、「自分のよさや可能性を、一人ひとりが実感すること」と「それぞれの違いを認め合い、自分の学びを深めること」の意義や価値を児童がより自覚できるようにしていきたいと考えます。児童一人ひとりの長所や目標に向かうプロセスを積極的に認めたり、価値付けたりすることで、児童が自己肯定感をより高めていけるようにしていきます。また、それぞれの考えを交流し合う場を設定し、自分の考えを深められるようにしていきます。そのために、自らの考えをもつ時間を十分設定したり、友達の考えを聞き、どのように考えが深まったのか振り返る時間を設定したりして、友達と学習することのよさを実感できるようにしていきたいです。

４ ご家庭の皆様へ

質問紙調査からは、附属小学校の６年生が、基本的な生活習慣を身につけ、主体的に日々の活動に取り組んでいることがうかがえます。そのことが、理解を深め学習内容を定着させることにもつながっていると考えます。さらに学びの様子を自らも振り返り、知識・技能のみならず、学び方も価値づけていくことで、より自己肯定感や活動に取り組む態度を育てていくことができると考えます。今回の成果と課題を踏まえ、今後も子供の成長のために学校と家庭が連携していきたいと思います。